

施設に整い戦場に向かった。昭和十九年十月二十二日、奄美大島北方トカラ列島東部海面で潜水艦の雷撃を受け沈没。

―船 団 護 衛―

海防艦戦務一筋

山口県 末 宗 勲

大正十五年五月二十六日、現在の山口市仁保上郷で生まれました。男六人、女五人の兄弟の五男とし、農業と土建業を営む父母に育てられました。当時の日本の国情からして、徴兵を待たないで海軍に志願し、昭和十八年四月二十日大竹海兵団に入団しました。

海兵団の訓練は当然厳しかったが、皆新兵でしたので水兵としては、銃剣術などの戦闘基礎教練など一般的な教育は約三か月で、内務では精神注入棒で叩かれたのは当然でした。

水兵として、敷設艦（機雷を海へ落していく）「サイ

ゴン丸」に乗り組みを命ぜられた。私が乗った時は豊後水道、紀伊水道あたりの勤務で、艦長以下二百人近い兵員でした。そこで敷設する機雷の構造などを教えられ、触角を付けたりましたが、機雷は一かかえ以上の球形で、周囲に触角があり、これに艦船が触れて爆発し沈没させる。丸い機雷の下に台があり、その下に目計りをつけたワイヤーが付けてある。水深に応じワイヤーの長さを決め水底へ落す。機雷は海底に落ちた台とワイヤーで繋がれ、海面より見えぬ程度の所に浮遊する仕掛けになっています。

敷設艦は潜水艦を防ぐため、航行しながら三十秒おきぐらいごとに海に投げ入れる。この頃は日本近海を主として行動したが、根拠とする港は敷設場所によって異なるが、ほとんど呉か佐世保の軍港だったと記憶しています。

その後、横須賀対潜学校に入校、機雷より爆雷の組み立てとか、針管を差し込んだりの作業の教育を受けた。爆雷は二百キロぐらいの重さ、百リットルドラム缶ぐらいの大きさです。両艦側から射出し、後部（艦

尾)から傾斜を利用し転がして落す。これが爆雷の攻撃方法で、このような教育訓練を受けたのであります。卒業後は、大分県佐伯防備隊に入隊し、機雷の組立てをしていました。

昭和十九年八月、「第三十八海防艦」に乗り込みを命ぜられました。機装の時から乗艦し、竣工したのは八月十日です(神戸川崎造船所、呉鎮守府籍となり、呉防備隊に編入、呉湾警備海防艦となる)。

九月十日、呉軍港で食糧弾薬等を搭載して、引き続いて佐伯対潜訓練隊で第四十六号海防艦と共に対潜対空の訓練を約一か月受け、十月六日、第一海上護衛隊に編入されました。

十月十五日から、いよいよ海上護衛のための出撃ですが、私は爆雷投下の担当です。爆雷砲台は側面に六基、後方一基で、一基には兵三名で指揮に下士官一名が配置されました。乗組員は百八十〜百九十名だったと記憶しますが艦長は少佐でした。海防艦の主任務は輸送船団の護衛で、船団を襲う潜水艦に対し爆雷を投下し、敵潜を沈没させるのです。

その時は、敵潜水艦の位置に合わせ、深度五十とか百メートルと信管を切り、水圧で爆雷が爆発して敵潜艦を沈没させたり、破損させて船団を雷撃から守るのです。艦両側の爆雷は火薬で百メートルぐらい飛ばすが、後部(艦尾)は、早く沈まぬよう落下傘のようなものを付けて落すのです。爆雷が艦からかなり離れてから爆発するように、それを見越してパラシュートを付けるのですが、早過ぎると艦が自爆してしまうからです。

第一回の護衛は、門司及び佐世保から出港しましたが、船団は輸送艦十八隻、護衛艦四隻で、シンガポール方面に向けて出撃したのです。十九日、佐世保沖で十六時頃、本艦は敵潜水艦を右四十五度、三千メートルに探知確認しましたので、我々は爆雷約三十発を投下しました。

その結果、海面に重油の浮くのを確認し、さらに敵潜水艦の艦内物品が多数浮上してきました。これによって撃沈は確実と認め、艦橋の横に撃沈マークを記入したのです。この戦闘では日本軍航空機一機が協力

しました。このように、昭和十九年後期には、マーシャル諸島は玉砕し、比島戦線も苦戦の時ですので、日本の周辺、内海にまで敵の潜水艦が出没していたのです。

九月二十日、第十二海防隊に編入され、二十三日、台湾沖で夜半二十三時頃、僚艦の「第三十四号海防艦」が敵潜水艦を探知して爆雷攻撃を行ったのですが、当船団も輸送船二隻が被害を受けたといえます。深夜のため戦果の確認は勿論、救助活動も出来なかつたやうでした。

我が護衛艦隊の四隻は急遽、澎湖島の馬公へ輸送船を護送し、遭難現場に急行、海上に浮かぶ乗組員や乗者の救助を行いました。僚艦は敵潜水艦の上級士官三名を救助し、台湾の高雄港へ連行したというのですから、敵潜水艦は我が方の爆雷攻撃で相当の被害（沈没）を受けたと思います。

我が護衛艦隊は、初陣ともいえる護衛行動で、二隻の敵潜を撃沈させ、さらに我が船団の乗員等の救助、敵上級将校を捕らえるという戦果を挙げたことになる

のでしょう。

十月二十六日、南支の廈門（アモイ）着。十月二十七日、海南島馬公着。十一月五日、仏領印度支那のサイゴン着。ここでは連日、B 29型爆撃機と戦闘。十一月十二日、さらに輸送船を護衛、シンガポール着。その間敵B 25の攻撃を受けたのを覚えていて、十六日、サイゴンの河を水先案内に従って通航してサンジャック寄港の上、途中対潜水艦を掃蕩しながらサイゴンに向かい、十八日、サイゴン着。

十一月二十日、補給艦「間宮」（大正十三年、神戸川崎造船で竣工した給糧艦）昭和十九年十二月二十日、南支那海の東沙島南西四百二十キロ附近で、米潜水艦の雷撃により沈没）は、弾薬を満載しマニラに向かうのを護衛艦四隻で護衛（サマー一四A船団と称す）してフィリピンのマニラに向かいました。

二十五日、二十一時二十分頃、マニラ、コレヒドール沖で「間宮」から敵潜発見の青色の発火信号が射ち上げられました。その直後、我が艦は敵潜の雷撃を受けました。魚雷は艦橋の下に命中、艦は間二つに折れ、

前部は艦橋もろ共、一瞬のうちに沈没しました。

その時、私は非番で、後部の爆雷砲の真下の第二分隊の居住所で寝ていました。居住所といっても、爆雷砲の基部が天井から下に張り出しているので立っては歩けぬ狭い場所です。艦が大きく震れたので、私は飛んで甲板へ上がりました。

艦の前半分はもう沈んで見えません。見張り等の何人かが海に投げ出されていました。私のいる後半分は立ったように傾き、私はやっと物につかまって立っていました。後部には機関兵と爆雷隊の第二分隊ですが、砲や機銃の第一分隊は前部だったので、瞬時沈没し誰の姿も見えません。当直の後部の見張りなどは何人か助かった。

艦後部は十五分くらい浮いていましたが、何分艦が小さいので一気にやられて沈没しました。私等は海に飛び込んだが、浮遊物はたいした物はありませんでしたが、木材などにつかまり、二時間くらい泳いで「第四十六号艦」に救助されました。

前部の人はほとんど戦死したが、救助された後も何

人か死んでいますし、夜中のことで救われず海没した人もいたでしょう。翌日僚艦が救けに行き何人かは救助されたのです。しかし夜中、海の中、何も見えぬ所に投げ出されたのだから、本当に運の良かった人だけが生き残り、大部分は海没という悲惨なことでした。

艦長林少佐以下八十余名戦死。後部部員は軍艦旗と共に海中に退去後救助され、マニラに入港しました。

翌朝沈没現場に直行し、機密書類などの浮流物を整理し、現地に残留して警備隊に編入された者もありましたが、私等は台湾の高雄へ、そのうち何人かは其処へ残り、私は呉軍港に帰りました。

私は昭和二十年一月に「海防艦第十六号」に乗組みを命ぜられたのですが、「第十六号艦」は前年の十月二十日、第十二海防艦隊に編入されていたといえます。その頃フィリピンのレイテ島には米軍は上陸していませんから、フィリピンに向け出発した我が「第三十八号艦」の船団が攻撃されたのも無理ありません。しかし、弾薬満載の輸送艦「間宮」を無事守り通し、自らを犠牲にした護衛艦の任務を遂行したということです。

次に「第十六号艦」勤務の状況を申し述べます。同艦が門司に付いたのは一月九日。二十二日、モタ三三船団（門司―台湾）八隻を護衛して門司発。二十九日基隆着。三十一日モタ三十九船団護衛、基隆発。二月八日門司着。

五月二十七日、敵潜水艦掃討に向かい出発。三十一日鎮海（朝鮮慶昌南道）着。六月四日鎮海発。五日釜山着。六日ワタA船団（釜山・台京）護衛のため釜山着。六日大東湾着、十四日青島着。十五日青島発。十六日大東湾着。十九日釜山着。二十二日ラモ四BC船団護衛、釜山発、萩着。二十四日「金衆丸」「雲山丸」を護衛、萩発。二十五日舞鶴着、その時空襲あり。七月十五日大阪警府長官指揮下に入る。

八月十一日「第六海防艦」と共に北海道の釧路に向い、十二日、石油を搭載、二艦は釧路発。十三日、零時十分、僚艦「第六号艦」は被雷したが石油を積んでいたため一瞬にして轟沈し、全員が戦死してしまいました。我艦は助かったのですから、運命、生死は紙一重の差だと、つくづく思いました。

終戦は室蘭で、全員集められて知らされました。十七日、同港発、日本海を航行し、二十二日舞鶴に着き、さらに出航し、関門海峡の東口で、敷設水雷に触れ、浸水しましたが、それを汲み出しながら呉軍港に着くことが出来ました。船は昭和二十年十一月三十日に除籍となりましたので、同日私は復員しまして、故郷山口へ帰ったのです。同郷上郷で六人一緒に志願した同年兵のうち、三名が戦死し、三人が生還しました。

私は帰還してから、体は若さと訓練のお陰で大丈夫でした。我々の隊や艦には召集兵もいましたが、現役や志願の者が多かった。その間、海防艦というのは小さく、兵員も二百名以下で予備員はいない。その上、長期に渡っての護衛作戦なので、常に全員が全力を発揮しませんと任務が遂行出来ません。そのため、艦長を中心とし相互の信頼感が重大です。兵学校を出てない商船学校出身の艦長は随分心を砕いていましたので、全員分け隔てない空気を作っていました。

まして「第三十八号艦」は前にも申したとおり、艦長以下幹部が一瞬にして戦没してしまいましたので、

生き残った人々は一年に一度集まって戦友会を開いています。将校の生存者は一人ぐらいで、兵隊は全国にまたがっているのです、私は三度ぐらいしか出席していませんが、辛い悲惨な思い出が現在は懐かしく思い出されています。

【解 説】

海上護衛に関する、海防艦関係について、公判戦史を参考として記してみる。

開戦時において護衛作戦に従事できる艦艇航空機の保有数は、旧式駆逐艦一六隻、水雷艇一二隻、掃海艇一九隻、海防艦四隻、敷設艦四隻、航空機二〇一機であった。

海防艦は、戦争後期において、護衛艦の主力となるべき艦種であり、「昭和十六年度戦時艦船建造及航空兵力拡充計画」で、海防艦三〇隻の建造が措置された。その後「昭和十七年度戦時航空兵力増勢及艦船建造補充計画」で更に一二隻の海防艦建造が織り込まれた。

開戦当初における海上護衛は、まだ護衛専門の部隊

がなく、内地、台湾、支那、関東州、朝鮮、樺太の沿岸並びにそれら相互間の航路を各鎮守府及び警備府が、またその他の区域の航路を連合艦隊が、それぞれ担当した。

護衛専門の海防艦建造計画による要望や実践教訓は、その後の新造艦艇に対し、逐次取り入れられていくことになった。搭載爆雷数も、昭和十七年二月起工（完成十八年三月以降）の択捉型海防艦一四隻には三六個搭載が増加。昭和十七年十月起工の御蔵型海防艦八隻（完成十八年十月以降）以後の海防艦には一二〇個の爆雷が搭載されるようになった。

開戦当初の外洋における船舶運航はほとんどが作戦輸送であり、用兵の関係上護衛は重視され一応順調に護衛が実施された。これは米国の対日潜水艦作戦は十分整わず、また極東海域で作戦従事出来る潜水艦は僅少、魚雷の機構上の重大な欠陥（不発が多かった）と絶対数が不足していたためといわれている。

海上護衛司令部が設置されその麾下に編入された第一海上護衛隊の担任航路は、内地昭南間各航路、比島

北及西航路、北ボルネオ航路、マニラ昭南航路。編制は駆逐艦九・海防艦六・水雷艇二・哨戒艇二・特設艦船三である。第二海上護衛隊の担任航路は、トラック航路、トラック、パラオ間航路。編制は駆逐艦三・海防艦四・水雷艇二・特設船舶一である。

海上護衛総司令部は昭和十八年一月十五日設置され、以来、対潜水艦を中心として、海上護衛関係の部隊編成が着々と進められた。総司令部は天皇直属のものとなされ、司令官には連合艦隊司令長官より先任の及川大将が親補されている。

開戦以来、敵潜水艦による船舶喪失量が増大し、海上護衛問題が次第に重大化するに伴い前記海上護衛総司令部が遅まきながら設置され、また海防艦を中心とする護衛艦艇増勢の気運が高まった。前述の昭和十六年計画三〇隻、十七年三四隻、十八年度以降二四二隻の海防艦新造が決定した。しかし十八年中期以後、既成艦船整備工事も多く、新造艦船工事に著しい影響を与えるようになった。建艦目標は達せられなかった。

昭和十九年五月海軍大臣の決裁を受けた建造予定表

によれば、昭和十九年、海防艦一八八、掃海艇四、駆逐艦五、駆逐特務班八八、計二八五隻。同二十年、海防艦一三〇隻。兩年の合計、海防艦三二八隻、掃海艇・駆逐艦計九隻、特務艇八八隻、総計四一五隻。

海防艦建造月別隻数、

昭和十九年一月一隻、二月八隻、三月十三隻、

四月五隻、五月四隻、六月三隻、七月六隻、

八月十一隻、九月十隻、十月十四隻、計七五隻。

駆逐艦計九隻。

一方、本期間中沈没した海防艦は一三隻であり、純増加数は六二隻である。

昭和十九年に入ると、戦局は全般に悪化し、敵潜水艦の活動もいよいよ活発となり、更に支那大陸方面からの大型爆撃機の爆撃も加わり被害は激増した。また一方では石油を始めとする南方産重要物資の内地送還が当面の緊急事となされ、第一海上護衛隊の責務はますます重大となった。

昭和十八年十一月末の編制艦種別内訳

駆逐艦四隻、海防艦四十隻、水雷艇二隻、

掃海艇二隻、哨戒艇一隻、特設砲艦二隻、

特設駆潜艇二隻、計五三隻。作戦指揮下艦艇、

特設空母・神鷹、練習巡洋艦・香取、海防艦二隻、

掃海艇五隻、哨戒艇二隻、駆潜艇五隻。

昭和十九年十二月十日付、従来の第一海上護衛隊は

「第一護衛艦隊」に昇格し、その編成は、

第一〇一戦体、第五護衛船団司令部、第七護衛船団司令部、第八護衛船団司令部、

付属、駆逐艦三隻、第一・第十一・第十二・第三十

一の各海防隊。海防艦三四隻、水雷艇二隻、

掃海艇二隻、哨戒艇一隻、第九三一海軍航空隊

昭和二十年に入ると戦局はいよいよ逼迫し、南方航路の途絶、機雷投下を含む本土空襲激化等による資材

難、造船能力低下等に伴い、海防艦竣工量も、昭和十

九年末をピークとして次第に降下していった。

本期間の海防艦竣工状況。

昭和十九年 十一月九隻、十二月一七隻、

昭和二十年 一月八隻、二月一一隻、三月一三隻、

四月九隻、五月四隻、六月一隻、七月五隻、

八月一隻、計七七隻。

この間の沈没数は五七隻であり、純増数は二〇隻に過ぎなかった。

一方、米海軍においても量産性能は低下した。昭和十八年二月（一九四三年）に護衛駆逐艦の大量生産を開始し、十二月五日までに二六〇隻を就役させた。しかし、多くの護衛駆逐艦は鋼鉄と工作機械不足のため、初め計画された蒸気タービンをディーゼル機関に変更を余儀なくせられ、その速力を落さねばならなかったという。

護衛艦種は、開戦当初から昭和十九年前半までは旧式駆逐艦が多かったが、十九年中期よりは海防艦が主力となっている。建造力の低下とは逆に戦局は益々悪化、昭和二十年一月敵機動部隊は南支那海に侵入、仏印沿岸をはじめ南支那海北部に猛威をふるい、「ヒハ六」船団を始め大被害を受け、対潜、対航空と、海上護衛は益々困難となってきた。特に輸送船の船員の消耗も激しくなった。

大東亜戦開戦より終戦までの船舶喪失数は

計 二、三九四隻。八〇一八、一二二トン

である。これに対し、建造数は、計 一、三〇三隻。

三、三六七、六八七トンである。また、護衛艦の主力海防艦の建造数は一六七隻である。

昭和二十年六月二十八日現在の、海上護衛司令長官の指揮する兵力は次のとおりである。

一、直率部隊 第九〇一海軍航空隊の大部（各機種約一三〇機）。

二、第一護衛艦隊 第一〇二戦隊（海防艦六隻）第一

〇三戦隊（海防艦一〇隻）第一海防隊（海防艦

五隻）第十二海防隊（海防艦三隻）第二十一海

防隊（海防艦六隻）第二十一海防隊（海防艦八

隻）其ノ他（各種艦艇約八隻）。

三、舞鶴鎮守府部隊 第一〇五戦隊（鹿島、響、海防

艦四隻）第三十一海防隊（海防艦七隻）其ノ他

（約四隻）。

大湊警府部隊 第一〇四戦隊（海防艦六隻）第

十一海防隊（海防艦三隻）第九〇三航空隊（各

機種六六機）其ノ他（各種艦艇約二十隻）。

鎮海警府部隊 直率部隊（小艇）。

第七艦隊 直率部隊（駆逐艦四隻、海防艦四隻）

—第九特別根拠地隊—

「ああわが戦友山尾隊」

長崎県 山尾 萬 樹

私の出生地は長崎県東彼杵郡波佐見町永尾二九六で、大正十一年十月十五日に生まれました。

昭和十四年十二月一日、江田島の海軍兵学校（七十一期生）に入校。昭和十七年十一月十四日、海軍少尉候補生を拝命し卒業しました。

その後、約二か月間、戦艦「扶桑」に乗り、江田島を中心に瀬戸内海で艦隊実務演習を受けました。艦隊実務演習を終えた昭和十八年一月十五日、官中に拝謁を許されまして、宮中三殿の参拝を済ませました。

同日、私は第九特別根拠地司令部付を命ぜられ、佐世保を出港。台湾、フィリピン（マニラ）、ボルネオ、